カンボディア・西トップ寺院の調査

―第７次・第８次―

１　はじめに

西トップ寺院は、アンコール・トム内にある石造建築寺院のひとつである（図27）。高さ８ｍほどの中央祠堂を中心に、その南北の両脇に小塔を配し、東側に仏教テラスと呼ばれる低い基壇がのびている（図28）。奈良文化財研究所は、国際協力事業の一つとして平成14年度からAPSARA（アンコール・シエムリアップ地域文化財保護管理機構）と共同で、この遺跡を調査してきた。

西トップ寺院の創建は、一般的には９～10世紀と考えられている。20世紀前半に北塔から発見された碑文が、ヤショヴァルマン１世（在位889－910年頃）の母方のおじ、サマッラヴィクラマによるヴィシュヌ像と建物の建立を記している。また、中央祠堂の楣石にはスレイ様式（10世紀）の紅色砂岩が用いられ、さらに中央祠堂の砂岩外装の内側に、化粧彫刻の施されたラテライト石材を一部みることができる。そのため、当初はラテライト石材を主体とした中央祠堂だけの小規模な建築であり、その後、一部の石材を転用しながら砂岩製の一回り大きな建物に改築されたと考えられる。続いて南北の小塔が建てられ、14～15世紀には仏教テラスが増築され、寺域を囲うラテライト石列と８組のシーマ石（結界石）が配置されて現在の姿になったと考えられる。

アンコールの最盛期はアンコール・ワットやアンコール・トムが造営された12世紀である。西トップ寺院は、アンコール最盛期の前後にわたって長期間存続した数少ない遺跡であり、アンコールの興亡を解明する上で特に重要な遺跡として位置づけられる。

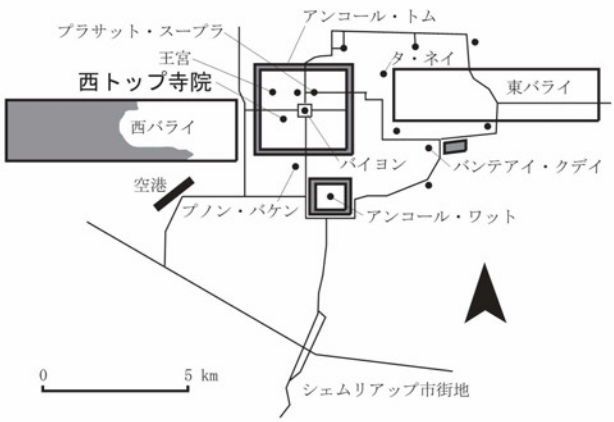

図27　アンコールの主な遺跡分布図

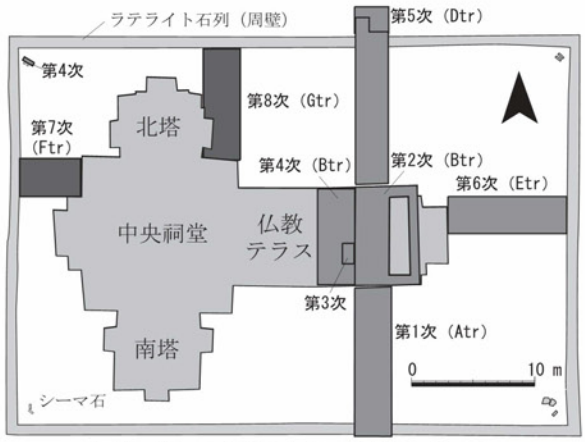

図28　西トップ寺院のトレンチ配置図　1：600

これまでの調査では、もっぱら東側の仏教テラスを重点的に調査し、出土した陶磁器などから14～15世紀に建立されたことが確かめられた。またテラスの建立に先立ち、周囲の地面を大規模に整地し、１～２ｍほど整地土を積み上げたことが確認された。しかし掘込地業の痕跡は見つかっていない。

本年度からは、これまで手付かずであった中央祠堂と南北小塔の周囲を発掘し、その年代および掘込地業の有無を確認することに調査の主眼を置くことにした。これは今後、解体修理などを伴う保存事業を展開していくにあたって重要なデータになると考えられる。

（杉山　洋・石村　智・森本　晋）

２　第７次調査

中央祠堂西側に東西５ｍ、南北3.5ｍの調査区を設定した（Ｆトレンチ）。調査期間は2007年７月18日～23日。

４層の主要な層位を確認した。第１層（深さ０～30cm）は表土である。第２層（30～80cm）は暗褐色のしまりのないシルトで、中央祠堂の地覆石がのる層である。ここからは白磁や青磁などの中国陶磁器が多く出土し、その年代は12世紀～14世紀後半にわたる。第３層（80～140cm）は黄褐色の緻密な粘土で、クメール陶器（年代不明）を若干含むものの、出土遺物は少ない。この層の上面には南北方向に溝があり、その埋土からは元代の白磁椀が出土している。第４層（140cm以深）は橙色の硬い粘土層で、遺物をまったく含まず、地山と考えられる。

中央祠堂の地覆石が載る第２層から14世紀の遺物が出土したことから、少なくとも現在の中央祠堂の砂岩の外装は14世紀以降に整えられたことが確認された。

（豊島直博・石村　智）

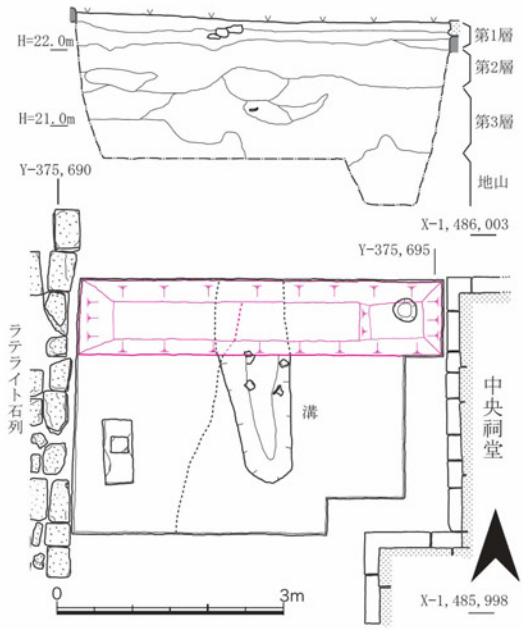

図29　第７次調査遺構平面図・北壁断面図　1：100

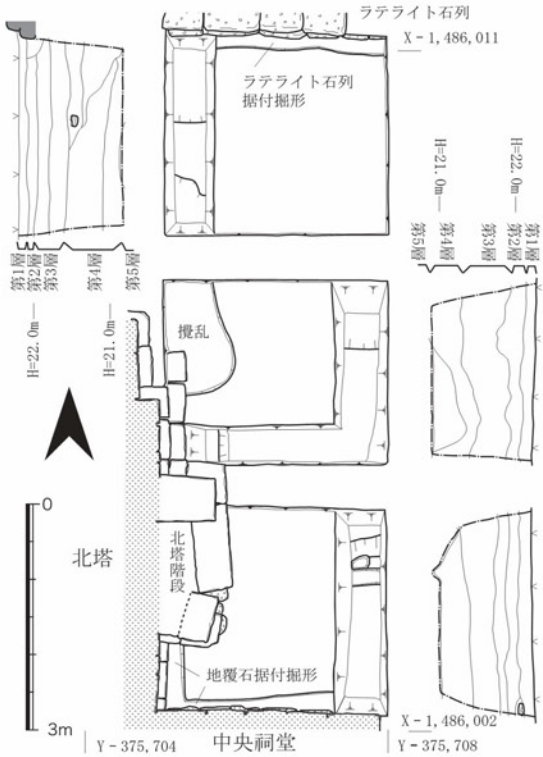

図30　第８次調査遺構平面図・東壁・西壁断面図　1：100

3　第８次調査

中央祠堂と北塔の接する部分から北に向かって東西３m、南北９mの調査区を設定した（Gトレンチ）。調査期間は2007年12月18日～22日である。

５層の主要な層位を確認した。第１層（深さ０～20cm）は表土である。第２層（20～50cm）は灰褐色のシルトである。第３層（50～80cm）は灰褐色のシルトに黄褐色のブロックが混じり、陶磁器が多く出土した。第４層（80～120cm）は暗灰色のシルトで、炭化物を若干含む。第５層（120cm以深）は黄褐色の粘土で、遺物をまったく含まず、地山と考えられる。第２層から第４層にかけて、14世紀頃の中国陶磁器がまんべんなく含まれていることから、これらは一連の整地土と考えられる。

中央祠堂・北塔の地覆石は第２層の上にのっているが、北塔の東側の階段の石材（踏石）は表土（第１層）の上に直接のっており、地覆石を持たない。そのため、この階段は後の時代に付け足されたものと推測される。

中央祠堂・北塔の地覆石がのる整地土に含まれる遺物の年代から、少なくとも両建物の砂岩外装は14世紀以降に整えられたことが確認された。　（林　正憲・石村　智）

4　まとめ

第７・８次の調査では、中央祠堂および北塔の周囲にも掘込地業の痕跡は確認されず、また、これらの建物の地覆石がのる整地土の年代は14世紀頃と示され、ほぼ仏教テラスと同時期であることがわかった。これまで中央祠堂の改築と南北小塔の建立は仏教テラスの建立に先立つと考えられていたので、新しい知見である。なお、考古学的には、これまで西トップ寺院が９世紀にさかのぼるとする積極的な証拠はみつかっていない。

しかし、中央祠堂の前身建物は、ラテライトと紅色砂岩を石材とした一回り小さな建物と考えられ、その痕跡は現在の建物の内部に入れ子状になって存在していると想定される。もし、前身建物に伴う掘込地業が存在するなら、その掘形ラインは現在の建物の内側にあることになる。プラサット・スープラ（11世紀末～12世紀前半）やバイヨン（12世紀末）では、日本国政府アンコール遺跡救済チーム（JSA）の調査によって掘込地業が確認されており、この工法はクメール建築で一般的に採用されていた可能性が高い。

つまり、西トップ寺院の年代および掘込地業を確認するには現在ある建物の内部を探るしかなく、それをおこなうのは解体修理の時をおいてほかにない。今後、解体修理をおこなう時には、同時に考古学的な発掘調査を実施し、両作業が連携してこれにあたることが重要になるだろう。　（石村　智）